

エレミヤ書28章「嘘を信じる誘惑」

1A 人目に良く、聞き心地の良い預言 1-11

1B 表面化した対立 1-4

2B 究極の御心 5-6

3B 実による判断 7-9

4B 偽りの善意 10-11

2A 鉄のかせを与え、滅ぼす預言 12-17

1B 愛の服従から隷属へ 12-14

2B 嘘を信じさせた対価 15-17

本文

エレミヤ書 28 章をお開きください。私たちの聖書通読の学びは 27 章まで来ましたが、今朝は 28 章全体を一節ずつ眺めてみたいと思います。

私たちは、自分たちの周りで、自分の内で好ましくないこと、不都合なことが現実として起こる時に、「そうであってほしくない」という思いが強く起こります。衝撃的なことが起こると、それがまだ現実味を覚えないものです。例えば、愛する人が亡くなれば、夢の中で何度も見るというようなことが起こりますね。これはごく自然の現象です。けれども、飽くまでもそれは過程としては正常であるけれども、いつかは現実のものとして受け入れ、直面することが、真実の心の癒しにつながります。それを、いつまでも偽りの中に生かすような言葉を言えば、それはその人にとって表面的には幸せを感じさせるものかもしれませんが、偽りの幸せであり、いつか全てが台無しにされます。

それがユダの民に起こっていました。ユダの民は今、自分たちの王、エホヤキンを始め、大勢の人々がバビロンによって捕え移されています。その痛みの中で、それでもエルサレムは大丈夫だ、バビロンによって滅びることはない。かえってバビロンを、神は打ち叩かれると信じたかったのです。そして、神がバビロンを打ち砕き、彼らは救われて、エルサレムに戻ってくると預言する者たちがいました。その中でエレミヤや、ごく少数の者たちだけが、「バビロンに服しなさい、そして自分の命を救いなさい」と預言していました。そこで、私たちは今朝、「偽りを信じる誘惑」について学んでいきます。

1A 人目に良く、聞き心地の良い預言 1-11

1B 表面化した対立 1-4

- 1 その同年、すなわち、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、第四年の第五の月に、ギブオンに出る預言者、アズルの子ハナヌヤが、主の宮で、祭司たちとすべての民の前で、私に語って言った。
- 2 「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。わたしは、バビロンの王のくびきを打ち砕く。3

二年のうちに、わたしは、バビロンの王ネブカデネザルがこの所から取って、バビロンに運んだ主の宮のすべての器をこの所に帰らせる。4 バビロンに行ったエホヤキムの子、ユダの王エコヌヤと、ユダのすべての捕囚の民も、わたしはこの所に帰らせる。・・主の御告げ。・・わたしがバビロンの王のくびきを打ち砕くからだ。」

「その同じ年」とありますが、27 章でエレミヤが預言したのと同じ年ということです。エコヌヤが捕え移されゼデキヤが王となってから第四年のことです。「第五の月」と正確な月もエレミヤは書き記しています。27 章において、エレミヤは祭司たちに対して、偽預言に惑わされることのないように警告していました。「27:16-17 私はまた、祭司たちとこのすべての民に語って言った。「主はこう仰せられた。『見よ。主の宮の器は、今すみやかにバビロンから持ち帰られる。』と言って、あなたがたに預言しているあなたがたの預言者のことばに聞いてはならない。彼らはあなたがたに、偽りを預言しているからだ。彼らに聞くな。バビロンの王に仕えて生きよ。どうして、この町が廢墟となつてよかろうか。」神殿の中にある礼拝で用いられる器が、バビロンに取り去られていたのですが、それが速やかに持ち帰られると預言していても、それを聞いてはならないと警告していました。

けれども、「ギブオンの出の預言者、アズルの子ハナヌヤ」がまさにそうした預言を語っています。主の名によって、主が語られたと言って、しかも「二年のうちに」という期限を定めて預言しています。なぜなら、主がバビロンを打ち砕かれるからだということです。当時は、ユダの国だけでなく、周囲の国々もバビロンに攻められて、一部、捕虜として連れて行かれた状況でありました。それで、彼らはバビロンに対抗するために軍事同盟を結んでいきました。彼らは異教徒でありましたが、それでもその異教の中で預言者や占い師、夢見る者たちが、バビロンは速やかに倒れるということを書いていました。それで、エレミヤは縄と枷を作り、それを自分の首に付けて預言していました。そうした言葉を信じてはいけないと注意していたのです。

こうやって、預言者たちの攻防戦とも言うべきことが起こっていました。多くの預言者が、すみやかにバビロンは滅ぼされると言い、エレミヤは、バビロンに服しなさい、そしてそこで生活しなさい、七十年後に戻ってくることができると預言していました。しかし今、水面下で行われていた熾烈な対決が、衆人環視、人々の見ている中で、あからさまに対決的姿勢をもって、ハナヌヤが預言したのです。エレミヤがいてそこで預言をしていたのでしょうか、そこにハナヌヤがやって来たのではないかと思います。ところで、ハナヌヤは、「ギブオンの出の預言者」とあります。エレミヤの出身地のアナトテととても近い町ですが、ギブオンも祭司の町として指定されていたところですから、エレミヤとは互角の立場です。祭司の家系にある男が、同じく祭司の家系のエレミヤに対して、預言において対決しているのです。

ユダの民の心情としては、ハナヌヤの言っていることが、「何としてでも聞きたい言葉」であったに違いありません。彼らの心の琴線に触れるような言葉であり、共感されることでありましょう。しかも、それを宗教の権威者から「主の御心である」という太鼓判、お墨付きをもらったのですから、

なんと慰められる言葉であったでしょうか。ハナヌヤは、「人々が聞きたいメッセージ」をしたのです。だれも、バビロンに降伏することで、ユダの国を亡くしてしまうことなど、受け入れがたい衝撃であったに違いありません。でも、それは偽りです。偽りによって慰めを与えることほど残酷なことはありません。

エレミヤの預言は、国として、民族として死を意味していました。けれども、人は死を受け入れなければいけない時があります。日本では昔は、癌告知は本人に行われないものでした。しかし、今はその考えが変わっていますが、人は死が近づいているなら、告知することで、その限られた時間からこそできることをできるようにすることができます。さらにキリストに希望を置いていますから、死後の命、復活を期待することができます。死を受け入れるからこそ、甦りの希望をますます強く抱くことができます。ですから、聞きたくない言葉であっても、それを受け入れることによって、初めて真実に生きることができるのではないのでしょうか。

癌に限らず、人は全て死ぬのですから、死を受け入れるというのは人生にとって最も大事なことです。その大事なことについて、確かな言葉、真実な言葉がいかに大切なのかは自明の理ではないのでしょうか？私たちは普段の生活で、「詐欺」というものに気をつけています。良い事を約束しておいて、相手にお金を取られてしまうという事件が後を絶ちません。それで国民消費者センターなどの機関も政府が用意していますし、私たちも怪しいものには近づかないように注意をしています。ところが、死について、人が死ぬことについて、どういうわけか「別に嘘でも構わない」と、自ら詐欺にあってもよいと決めてしまっている人々が多いので驚いています。死について、死後のことについて、どれだけ多くの方が真実を求めているのでしょうか？「死んだら、肉体がなくなったら全て無くなる」という人がいますが、確かめて見たことがあるのでしょうか？「死んだら、天国に行く」と言う人々もいますが、その保証はどこにありますか？そして、映画や歌などには、死んだのに、それを受け入れられなくて、霊がそこら辺にいる、ある人の体に移り移って、まだ話しかけている、というようなものが非常に多いです。けれども、私たちはそんなことが起こるのはなく、あっても作り話だということは知っているのにも関わらず、そうなんだと信じ込むことによって自分を慰めようとしています。これは、ハナヌヤの預言を信じているユダの民と同じことです。

しかし、私たちの信じている福音は、確かに死に、墓にまで葬られたのに、それでも三日目に甦った方がおられることを教えています。それが歴史的事実として起こったことを教えているのが、福音です。

2B 究極の御心 5-6

5 そこで預言者エレミヤは、主の宮に立っている祭司たちや、すべての民の前で、預言者ハナヌヤに言った。6 預言者エレミヤは言った。「アーメン。そのとおりに主がしてくださるように。あなたが預言したことばを主が成就させ、主の宮の器と、すべての捕囚の民がバビロンからこの所に帰って来るように。

エレミヤは、挑発的なハナヌヤの言動に対して、不必要に対立を大きくしようと思いません。柔軟に対応しています。そして大事な点を挙げています、ハナヌヤの言っていることは、アーメン、その通りであり、主がそのようにしてくださるようにと願っているのです。それもそのはず、神は確かに持ち去られた神の宮の器について、七十年後にバビロンを倒してから戻すと約束してくださっているからです。ハナヌヤは二年のうちにと期限を付けたのですが、エレミヤは七十年という期間が満ちてからと言っています。27 章 22 節にはこう書いてあります。「それらはバビロンに運ばれて、わたしがそれを顧みる日まで、そこにある。…主の御告げ。…そうして、わたしは、それらを携え上り、この所に帰らせる。」主が顧みる日があって、それから携え上らせてくださるのです。

私たちは、主の御心について、その時を誤ればそれが神からのものではなく、悪魔からのものになることさえあります。例えば、主が再臨されてから地上に神の国を立てられますが、その時は狼が子羊と共に宿するという幻があります(イザヤ 11:6)。私たちはそのような平和が来ることを望んでいます。しかし今、「だから、狼を恐れてはいけない。羊が狼と共に暮らすことを進めていかなければいけない。」と言ったらどうなるでしょうか？大変なことですね、羊飼いが敵を追い散らすという行為を取り除いたら、羊はたちまち敵に喰われて、死に絶えてしまいます。同じように、イザヤ書には「彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。(2:4)」とあります。では、今、剣を持っている国が軍隊にしる警察にしる、それらを今、私たちがなくすのが御心でしょうか？いいえ。だれでも、戦争なき平和を求めています。しかしイエス様は、人には罪があるから、戦争がなくなるどころか、「国が国に、民が民に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。(マタイ 24:7)」と予告されたのです。偽預言になる時は、その願い自体は御心にかなっていても、時を間違えて語っていることがあります。

では、なぜ間違えるのか？それは、往々にして「キリストの十字架を経ない平和や救い」を求めているからです。アダムが罪を犯したから、人々に戦いがあります。その罪を取り除くことができるのはキリストの十字架のみです。「エペソ 2:14-15 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、…」とあります。

イエス様が、バプテスマを受けられてから御霊によって、荒野に連れて行かれました。そして、悪魔の試みを受けられましたが、その一つがこの世の栄華を見せられた時のことです。「マタイ 4:8-9 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。『もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。』」イエス様は、「神である主だけを拝み、主にだけ仕えよ、と書いてある。」と言われて退けられましたが、主は、いずれ世界の全ての栄華をご自分のものとされるのです。全能者、主権者であられる神ご自身であり、神の御子なのですから、万物を相続される方なのです。ですから、悪魔の言っていることは最終的にその通りなのです。しかし、今それを行なうことは、まさに悪魔の誘惑であります。な

ぜなら、イエスさまは、仕えられるために来たのではなく、仕えるために来られたのであり、そして人の罪の贖い金を支払いに来られたからです。今、その時ではなかったのです。そして、十字架を経ない理想は、偽りであり、悪魔から来たものです。

3B 実による判断 7-9

7 しかし、私があなたの耳と、すべての民の耳に語っているこのことばを聞きなさい。8 昔から、私と、あなたの先に出た預言者たちは、多くの国と大きな王国について、戦いとわざわいと疫病とを預言した。9 平安を預言する預言者については、その預言者のことばが成就して初めて、ほんとうに主が遣わされた預言者だ、と知られるのだ。」

エレミヤがここで挙げている点はとても大切です。「私と、あなたの先に出た預言者たち」と言っています。先の預言者と言えば、イザヤがおり、ヨエル、アモス、ホセア、ミカ、ゼパニヤ、ナホム、ハバククなどがいます。彼らも同じように、戦いと災い、疫病について語りました。エレミヤの語っていることは、惑わされたものでも、奇妙なものでもありませんでした。神の啓示を受けた他の預言者たちと調和していたのです。そして何よりも、後に現れるキリストご自身と調和しています。主は、天における幸い以上に、地獄、ゲヘナにおける苦しみについて警告されました。

したがって、ここから言えることは、神は矛盾することを語られることはないということです。主が語られる時に、人が御霊によって強い思いが与えられた、また信仰によって語るべき言葉があると言う時に、他に神が与えられた言葉と調和していないといけません。これが、説教者が気をつけて準備していることです。聖書の中で、その一部を取り上げて自分の語りたいことを語るのではなく、聖書全体の中で、その流れの中で、主が何をこの箇所で言われようとしているのかを話します。

そして、9 節ですが、「その預言者のことばが成就して初めて、ほんとうに主が遣わされた預言者だ、と知られるのだ。」という言葉も大事です。預言者は重責が与えられていました、神からのものであれば必ずその預言はその通りになりますが、もしそうでなければ偽預言者ですが、彼は殺されなければいけないとあります。「預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。(申命 18:22)」非常に厳しいです。

ところで、イエス様は預言を行なわれました。それは、三日目に甦るといふ預言でした。まだ十字架で死なれる前に語られました。そこで、十字架に付けられ、葬られた時に、祭司長たちは何と、総督ピラトにこう言っています。「マタイ 27:63-64 閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる。』と言っていたのを思い出しました。ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった。』と民衆に言うかもしれません。そうなると、この惑わしのほうが、前のばあいより、も

つとひどいことになります。」だから、甦るといふことをイエス様は公言しておられたのです。それで兵士たちを墓の入口につかせていましたが、イエス様は甦られました。もし甦らなかつたら、ペテロは教師です。律法によれば、この人は殺されなければいけません。しかし、その通りになりました。

4B 偽りの善意 10-11

10 しかし預言者ハナヌヤは、預言者エレミヤの首から例のかせを取り、それを砕いた。11 そしてハナヌヤは、すべての民の前でこう言った。「主はこう仰せられる。『このとおり、わたしは二年のうちに、バビロンの王ネブカデネザルのくびきを、すべての国の首から砕く。』」そこで、預言者エレミヤは立ち去った。

ハナヌヤは、人々の前で、エレミヤに恥をかかせました。エレミヤが神に命じられて身に付けていた枷を取り、砕きました。そして、神がこの通りにするのだ、と宣言しています。ハナヌヤは人々に強い印象を与えるのに成功したことでしょう。私たちは、このような雄弁で、人々に強い印象を与える言動に影響されやすいものです。しかし、主は、預言は吟味するものであることを教えられました(1コリント 14:29)。エレミヤはいきりたって、対抗して語ることもできましたが、彼は成熟した人です、そのまま立ち去り、余計な対立を作りませんでした。しかし、本物の対決、神の真理についての真剣な対決を神から命じられます。

2A 鉄のかせを与え、滅ぼす預言 12-17

1B 愛の服従から隷属へ 12-14

12 預言者ハナヌヤが預言者エレミヤの首からかせを取ってこれを砕いて後、エレミヤに次のような主のことばがあった。13 「行って、ハナヌヤに次のように言え。『主はこう仰せられる。あなたは木のかせを砕いたが、その代わりに、鉄のかせを作ることになる。14 まことに、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。わたしは鉄のくびきをこれらすべての国の首にはめて、バビロンの王ネブカデネザルに仕えさせる。それで彼らは彼に仕える。野の獣まで、わたしは彼に与えた。』」

立ち去った後に、ハナヌヤと一対一になった時に、主からこの言葉を言うように語られました。木の枷なら砕くことはできますが、鉄の枷であればできません。つまり、バビロンの支配は決して免れることはできない、ということです。実に、野の獣までがバビロンにおける支配や主権の力を感ずるほどになるということです。

ここでとても大事な霊的原則があります。木の頸木について、私たちがそれを負わなければいけないと主が語られる時に、愛の服従によるものであり、それは後に幸せをもたらすものです。バビロンに降伏すれば、その捕らわれの身においても、主がそこで守ってください、七十年後には引き返すことができるようにしてくださいます。たとえそのことが理想的ではなくとも、力強い主の御手があるので、自分がへりくだることが大切であると以前、勉強しました。そして、主がご自分の弟子たちに負わせている頸木があります。しかし、それは軽いとあります。「マタイ 11:28-30 すべて、疲

れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

では、私たちが愛によって服従することがなく、それを砕いたらどうなるでしょうか？自由になるでしょうか？いいえ、鉄の頸木ですが、これは完全に従属すること、奴隷のようになってしまうことを意味します。交読で読んだ詩篇第二篇にもそのような国々の姿があります。「2-3 節 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」「2:9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」主からの枷を打ち砕くならば、鉄の杖によって粉々にされます。

愛によって従うのでなければ、強制的に厳しい処置を受けるということです。神の主権を前にして、そのどちらでもないということはありません。私たちにとって、イエスは主です。全ての人にとってイエスは主です。今、この方に自分を明け渡すなら、救い主であられます。しかし、この方から自由にされようと思うなら、自由になるのではなく、永遠の地獄の中にいるのです。神は愛しておられます。その愛に対して、何も持っていないで、そのまま行ってください。自分を良くしようと思わず、そのままのあなたで十字架に行ってください。神の愛への応答、その愛の服従のみが人を救います。そうでなければ、罪と死の支配と恐怖の中で苦しまなければいけません。

2B 嘘を信じさせた対価 15-17

15 そこで預言者エレミヤは、預言者ハナヌヤに言った。「ハナヌヤ、聞きなさい。主はあなたを遣わされなかった。あなたはこの民を偽りに拠り頼ませた。16 それゆえ、主はこう仰せられる。『見よ。わたしはあなたを地の面から追い出す。ことし、あなたは死ぬ。主への反逆をそそのかしたからだ。』」17 預言者ハナヌヤはその年の第七の月に死んだ。

偽預言者に対する厳しい裁きです。彼は二年のうちに、神がバビロンを打ち砕くと預言しましたが、自分自身が二か月のうちに打ち砕かれてしまいました。しかし、言い換えれば二か月の猶予はありました、彼が悔い改めればできるはずでした。

彼が死んだのは、「偽りに拠り頼ませた」という悪、また、「主への反逆をそそのかした」という悪のためです。偽りを信じて滅んでしまう、神への反逆によって死んでしまうということは、本人の罪ですが、それを唆すことについては、もっと大きな罪があります。人々をつまずかせる罪であり、滅びへと向かわせる罪があります。イエス様は、言われました。「ルカ 17:1-12 つまずきが起るのには避けられない。だが、つまずきを起こさせる者は、忌まわしいものです。この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。」

いかがでしょうか、私たちは今一度、自分の信じていることがはたして、真実の上に立っているか確かめたほうがよいのではないのでしょうか？「私は何も信じていない」ということは、実は、「あまりにも信じてしまっているので、信じているという言葉さえも浮かんでこない。」ことがあります。例えば、今、地震があったとしましょう。そうすれば、どこかに机に隠れるでしょう。けれども、この建物が壊れるとは思わないはずです。それはこの建物の耐震設計を信じているからです。自分がこれまで頑張りで生きてきた、その自分の知力、体力、気力を信じているかもしれません。けれども、それがどれほど頼りになるのでしょうか？キリストのみ、この方がされたことのみが、頼ることができる礎です。神の愛の中に飛び込みましょう。